日本スポーツ社会学会第 36 回大会　研究委員会企画シンポジウム（第一報）

題目：

市井の人々とスポーツの遭遇

～一次史料・フィールドワーク・理論で読み解く「住民とスポーツの社会学」

企画趣旨：

現代社会において、スポーツは単なる個人の健康増進や娯楽の枠を超え、国家規模のプロジェクトだけでなく地域振興や都市開発にとっても重要な役割を担っている。大型スポーツ施設の建設、プロスポーツチームの誘致、メガスポーツイベントの開催などは、地域活性化の起爆剤として語られる一方で、時に地域住民の生活環境の変容、立ち退き問題、財政負担、あるいは環境破壊といった摩擦や対立を地域社会にもたらしてきた。

時に、こうした状況下では日常生活を守ろうとする住民によって展開される「住民運動」が行われてきた。もちろん住民運動は抵抗のような対立的なものだけではない。地域の課題解決やコミュニティの再生、新たな価値創造の手段としてスポーツを主体的に「活用」・「再定義」し対話を行うような、協働的な実践も確認することができる。これまでのスポーツ社会学においてはこうした住民運動の姿が、数多く取り上げられ明らかにされてきたといえる。

一方で、こうした住民運動の複層性という実態が明らかにされてきたということは、これまでのスポーツ社会学による一連の成果が均質で単一な手法ではなく、様々な方法論や分析視覚が駆使されることでその複層性を見出してきたといえるだろう。文献からインタビューまで、理論から実証まで、とスポーツ社会学の方法論は幅広い。それぞれの研究者はどのような立場とスタンスで持って取り組んできたのだろうか。

本企画では、「住民運動」と「スポーツ」の交差に対し、研究者はどのような方法論でもって分析を試みるのか／試みているのかを、「一次史料」「フィールドワーク」「社会学理論」の 3 つの方法論から考えたい。それぞれ住民とスポーツが遭遇する現場に立ち合うという点では一緒だが、その遭遇をどのように分析するのかという点で、用いる方法の質に違いがある。

登壇者とテーマ：

古木龍太郎（名古屋大学大学院文学研究科）

「一次史料から読み解く」

糸数温子（琉球大学）

「フィールドワークから迫る」

高原太一（成城大学グローカル研究センター）

「理論から考える」